

上級日本語学習者の意見文における「と思う」系 および「と考える」系の使用傾向について

——日本語母語話者との比較を通じて

高 恩淑

1. はじめに

上級段階にある日本語学習者の作文指導において、アカデミックな文章を書く力をつけるために意見文を書かせることが多いが、学習者の書いた作文をみると不自然な文末形式に違和感を覚えることがしばしばある。

- (1) インターネットは便利だとはいえ、新聞や雑誌がもういらないわけではない。かわりに、新聞や雑誌はあいかわらず、自分なりの価値を持って、残されると思う。紙は木によって作られて、生命力を持つからだと思う。(TM039)⁽¹⁾
- (2) 今はインターネットの時代と言っても過言じゃないほどインターネットは私たちの生活にもっともしんみつなものだと思っている。(KR032)

このような文末形式は、日本語が上達してもなかなか使いこなせない文法項目の一つである。本稿では、日本語学習者の作文における文末形式の使用傾向を探る一環として日本語母語話者と上級日本語学習者の意見文を取り上げ、主観的な判断を下す際に多く用いられる文末形式「と思う」系

(1) 例文の出典は、国籍、作文番号の順で表記する。TMは台湾人日本語学習者、KRは韓国人日本語学習者、JPは日本語母語話者を指す。

(例：思う／思っている／思われる) と、「と考える」系 (考える／考えている／考えられる) について考察を試みる。日本語母語話者との比較を通じて、日本語学習者の意見文における文末形式の不自然さの諸要因を明らかにし、日本語学習者のためのアカデミックな文章表現の指導に繋げていきたい。

2. 先行研究

2.1 作文における意見の述べ方や文末表現をめぐって

佐々木 (2001) は、課題に基づく意見の述べ方について日本人大学生と中国人日本語学習者の意見文を分析し、日本人大学生の作文は、「(話題提示) →自分の立場表明→理由の説明→結論」という構成が94.2%を占めているのに対し、中国人学習者の場合は明らかなパターンが見いだせないとしている。

伊集院・高橋 (2004) は、中国人学習者 (CN) と日本語母語話者 (JP) の意見文を比較し、文末のモダリティに見られる“Writer/Reader visibility” (談話参加者の存在の明示度) について考察している。その結果、CN は JP より「行為系のモダリティ (「勧誘」「行為要求」)」、「評価のモダリティ」、「伝達態度のモダリティ」を多用しており、CN に多く見られるモダリティは対話性が強く、読み手に働きかける機能を持つことから、CN の意見文が JP より“Writer/Reader visibility”が大きいと指摘している。

一方、宮原 (1998) は、中級後期から上級段階にある日本語学習者の作文の問題点について、中級後期から上級段階になると文末表現が豊かになって文に様々なニュアンスを付与し、文章を質的に高める場合もあるが、文末の複雑さや疑問表現の形の不適切さのような新たな問題が生じると述べている。この他に、日本語学習者を母語別 (中国語と韓国語)・学習段階別に分け、アンケート調査を通じて日本語学習者がモダリティの推量表現をどのように習得しているかを分析した大島 (1993) や、日本語母語話

者を学齢ごとに分けて作文における文末モダリティの発達過程を中上級日本語学習者と比較している佐々木・川口（1994）等がある。

従来の研究において日本語学習者の作文における意見の述べ方や文末表現の特徴、習得過程などを明らかにしようとする試みは多く成されてきたが、日本語学習者の間違いやすい文末形式を取り上げ、その使用傾向や誤用の要因を探った研究はほとんど見当たらない。

2.2 文末形式「と思う」、「と考える」をめぐって

橋本（2003）は、「と思っている」に焦点を当て、コーパスを用いて日本語母語話者と日本語学習者の使用傾向の違いを教育文法の観点から詳しく述べている。これまで「と思っている」は、〈一定期間の思考の継続〉といったアスペクト面から説明されることがほとんどであったが、橋本（2003）は、「判断文+と思っている」（特に、〈断定〉の場合）は、アスペクト的意味だけでなく、「信念」「こだわり」といった話し手の主張を強調する二次的な意味が生じるとしている。さらに、学習者は、「と思っている」をアスペクトの面からしか捉えていないため、二次の意味を必要としない文脈でも使用しており、その結果文脈にそぐわない不自然な文となると指摘している。

一方、森山（1992）は、「思う」、「考える」、「気がする」のように文末表現として機能する動詞を「文末思考動詞」と呼び、典型的なものとして「と思う」を挙げている。「と思う」の基本的な意味を「個人情報提示」とし、「と思う」内部に来る情報が「客観的な情報」か「主観的な情報」かによって、前者が「不確実表示用法」（例：先方は三時にくると思います）を表わし、後者が「主観明示用法」（例：日本の今の医療制度は間違っていると思う）を表わすと説明している。

庵ほか（2001：189, 208）では、「と考える」は「と思う」と同じような1人称の認識を表せるが、「と思う」が主に話し言葉で使われるのに対し、「と考える」は書き言葉で使われるとしている。また、「と思う」は話

し言葉・書き言葉の両方で使われるが、話し手の個人的な考えであることを明示するための表現であるため、客観的な情報を示す必要がある場合や論文などには適しないと述べている。

以下では、これまでの先行研究を踏まえながら、日本語母語話者と上級日本語学習者の意見文に見られる判断の文末形式「と思う」系、「と考える」系の使用傾向を明らかにし、その違いを分析することで日本語学習者の作文指導に役立てたい。

3. 日本語教育現場における「と思う」系および「と考える」系の扱い

上級日本語学習者の意見文における「と思う」系と「と考える」系の使用傾向を述べる前に、まず実際に日本語教育現場で使用されている初級の教科書と、それぞれに付随する日本語教師用の指導書において、「と思う」系と「と考える」系がどのように記述されているのかについて見ておこう。

5種類の教科書⁽²⁾を見てみると、いずれも「と思う」と「と思っている」がそれぞれ別の課で扱われているが、「と思っている」は、「～（よ）うと思っている」といった一つの表現形式として提示されている。本文や練習問題などの用例も、「～（よ）う／～たいと思っている」の形式だけが挙がっている。それぞれに付随する日本語教師用の指導書や文法解説書を見ても、「と思う」と「と思っている」の違いを人称やアスペクト的な面からきちんと整理して説明しているものは見当たらない。また、「と思われる」についての言及も見られない。『新文化初級日本語Ⅰ・Ⅱ』（文化

(2) 『みんなの日本語Ⅰ・Ⅱ』（スリーエーネットワーク編）、『新日本語の基礎Ⅰ・Ⅱ』（海外技術者研修協会）、『初級日本語 げんきⅠ・Ⅱ』（坂野永理・池田庸子・大野裕）、『新文化初級日本語Ⅰ・Ⅱ』（文化外国語専門学校編）、『進学する人のための日本語初級』（日本学生支援機構 東京日本語教育センター）

外国語専門学校編)の指導書だけが、「と思っている」を以前から持っている考えを述べる表現で、第三者の考えを述べる時にも使われると記述しているが、教師が質問する際の注意点として挙げているだけで、学習者には指導しないことにしている。

一方、初級日本語教科書において、「と考える」系(考える／考えている／考えられる)は全く扱われていない。指導書や文法解説書をもても、「と思う」系と関連付けて説明しているところは見当たらない。中上級レベルの学習者において、「と思う」の過剰使用が問題になることが多いが、初級において主に話し言葉の「と思う」と「と思っている」だけを導入していることがその要因の一つであると考えられる。

4. 調査の概要

i) 調査データと対象

本稿では、伊集院郁子作成の公開データ「日本・韓国・台湾の大学生による日本語意見文データベース」(2011年3月)の一部を用いて分析を行う。データは、「インターネットが自由に使える時代に新聞や雑誌は必要か」というテーマで、辞書などを使用せず約60分で800字程度に執筆したものである。調査対象は、東京都内の大学で文系を専攻している日本人大学生74名(以下、JP)と、韓国、台湾の大学に通う日本語能力試験1級レベルの上級日本語学習者74名(韓国人37人、台湾人37人。以下、前者をKR、後者をTM、両者をKR+TMと称する)である。

ii) 調査方法

今回の調査では、「データベース」所収のファイルを一つずつ手作業で確認しながら、数をかぞえた。

iii) 調査の結果

次の表は、JP・KM・TMにおける文末形式「と思う」系と「と考える」系の使用度数を挙げたものである。表中のセルの色つきは文末形式に

において著しく差があるものを指す。【表2】で韓国人学習者と台湾人学習者を分けたのは、学習者の国籍による作文の特徴が現れるかを見るためである。

【表1】 JP・KR+TM における出現数

	JPの文末形式	度数	KR+TMの文末形式	度数
1	と思う ⁽³⁾	78	と思う	158
2	と考える	42	と知っている	37
3	と考えられる	13	と考えている	7
4	と思われる	9	と考えられる	4
5	と思える	3	と考える	1
6	と知っている	1	と思われる	1

【表2】 KR・TM における出現数

KRの文末形式	度数	TMの文末形式	度数
と思う	87	と思う	71
と知っている	10	と知っている	27
と考えている	2	と考えている	5
と考えられる	2	と考えられる	2
と思われる	1	と考える	1
と考える	0	と思われる	0

5. 調査結果の分析

ここでは、日本語母語話者との比較を通じて、上級日本語学習者の意見文に見られる判断の文末形式「と思う」系と「と考える」系の使用傾向を検討する。主に、日本語母語話者の使用状況を基準として上級日本語学習者の使用傾向を分析する方法をとる。

(3) 言語形式は常体で代表させる。

5.1 「と思う」の使用傾向

「と思う」(敬体「と思います」を含む)の場合、日本語学習者(以下、KR+TM)の方が母語話者(以下、JP)よりおよそ2倍多く使用している⁽⁴⁾。「と思う」は、基本的に話し手の主観的な考えを述べる表現であるが、日本語記述文法研究会編(2003)によると、主体の1人称者を言語表現化しない場合、「と思う」は推量の「だろう」に近づくという。これは、森山(1992)の言う「不確実表示用法」として使われる「と思う」が、「だろう」や「でしょう」に置き換えが可能であることとも相通じるものである。

では、KR+TMにおいて「と思う」の使用が目立つのは、推量を表わす際に「だろう」や「でしょう」などを使わず、代わりに「と思う」を用いることに起因するのではないだろうか。次の表は、JP・KM・TMにおいて「断定回避」を表す表現の使用度数を挙げたものである。

【表3】からもわかるように、JPがKR+TMに比べ「だろう」を3倍以上多く、「でしょう」と「であろう」をおよそ1.5倍近く使用している。

一方、「断定回避」の意味を表わす「と思う」は、「と言える」と置き換えが可能であるが、「と言える」の場合は、JPとKR+TMにおいてほとんど違いが見られなかった。

【表3】 JP・KR+TMにおける出現数

JPの文末形式	度数	KR+TMの文末形式	度数
だろう	78	だろう	24
でしょう	19	でしょう	13
であろう	19	であろう	12
と言える	6	と言える	5

(4) 日本語母語話者に比して日本語学習者の方が「と思う」を多用するということは、佐々木・川口(1994)、佐々木(2001)、橋本(2003)、伊集院・高橋(2012)でも指摘されている。

【表4】 KR・TMにおける出現数

KRの文末形式	度数	TMの文末形式	度数
だろう	11	だろう	13
でしょう	4	でしょう	9
であろう	7	であろう	5
と言える	2	と言える	3

以上のように、JPに比べKR+TMの「だろう」の使用度数が少ないことから、JP・KM・TMの「と思う」の例を、「だろう」（「でしょう」（敬体）、「であろう」（常体））に置き換えてみると、KR+TMの方がJPより2.5倍以上多く置き換えが可能であった⁽⁵⁾。

- (3) 名前はおなじけれど、店で買ってちよくせつ読むものか、ネットでかるくせつするもののかによってそのなかみと、それをおもに要する人々は多様に現われると思う。(KR037)
- (4) パソコンが苦手から、一部の年上の人には、一度もインターネットでニュースを見たことはないのもいると思います。(TM057)

よって、KR+TMは推量を表わす際に「だろう」や「でしょう」を使わず、代わりに「と思う」を用いる傾向があると捉えられる。KR+TMは意識しないうちに、「と思う」の推量化、断定回避化を進めているのではないだろうか。KR+TMにおいて推量を表す副詞「おそらく・たぶん・きっと～だ」などを使って、推量構文を作っている可能性も考えられたが、今回のデータではKR+TMで5例、JPで1例（きっと～だ）しか見当たらなかった。

一方、思考・認識を表わす動詞「思う、考える、信じる、感じる」など

(5) KR+TMは、「と思う」の158例のうち31例(21+10)で、JPは78例のうち6例

は人称制限があるため、文中に主語を明示しなくても一人称主体であることが読み取れるが、JPの意見文では「私は～と思う」（「～と私は思う」の例も含む）のパターンが4割近くを占めており、その大部分が意見文の冒頭、または結尾に置かれている。しかし、KR+TMの意見文の場合、約1.5割だけが一人称主体を明示しており、冒頭や結尾に限らず全体にわたって使われている。このことから、KR+TMは「と思う」を話し手の立場表明に限らず、推量化した形式として幅広く用いるのに対し、JPは「と思う」を話し手の立場表明や、自己主張を示す言語形式として使用する傾向があると言える。他に、KR+TMの意見文では、用例(5)、(6)のように「と思う」を続けて使用する傾向が見られる。

(5) それからインターネットで記事を見ると自分がきよみある情報を見ることがどんどん多くなると思います。自分が好きなことあるいはきよみあることを見るのはいいことにもなると思いますが、一方では好きなことしか分かってその以外のことは分からないこともあると思います。インターネットでニュースや記事を読むのはそれなりのいいことがあると思います。(KR016)

(6) そして、インターネットで文章を読む感じと実体の本を読むのが全然違うと思います。読書なら、やはり紙の方がいいと思います。ですから、私は新聞や雑誌は現在の人の情報工具にとして、必要だと思います。それとも、環境問題もありますので、現在の人達の共同の宿題として、頑張りうと思います。(TM020)

以上のように、KR+TMにおいて「と思う」の過剰使用が見られるのは、他の類似表現の習得が十分にできていないか、または「と思う」の使いやすさに起因すると考えられる。

5.2 「と考える」の使用傾向

「と考える」は、「と思う」とともに一人称主体の主観的な判断や意見を表わす表現であるが、KR+TMの意見文にはほとんど現れない。JPの意見文では、「と考える」が「と思う」に次いで多く使用されている(42例)のに対し、KR+TMではわずか1例だけがTMに見られる。

- (7) 私は、インターネットが自由に使えるようになった今も、新聞や雑誌は必要であると考える。以下に理由を述べる。(jp002)
- (8) 私たちは一日中二十四時間を使ってニュースを見るわけがない。世界各地のニュースを読み切りわけもない。重要で自分に密接な関連があるニュースだけを見たらいいと考える。(TM050)

伊集院・高橋(2012:9-10)では、「主張」の述べ方について、母語話者は学習者に比してモダリティ表現の使用が多く、個別の言語形式では「だろう」と「考える系」の使用が目立つが、学習者は「思う系」の使用が顕著であると指摘している。KR+TMにおいて「と考える」の使用が極めて少ないのは、客観的かつ論理的な論拠に基づいて判断を下す場合も「と考える」ではなく、「と思う」を使用する傾向があるからではないだろうか。

JPの意見文における「と考える」の使用傾向をみると、「私は～と考える」(「～と私は考える」例を含む)のパターンが約7割を占めており、その6割以上が意見文の冒頭、または結尾に現れている。また、JPは「私は～と思う」「私は～と考える」という言語形式を多用しているが、両形式を混ぜることなく、どちらか片方だけを使用する傾向が強い。「私は～と思う」「私は～と考える」のパターンに限らず、「と思う」と「と考える」を混ぜて使用している作文は、意見文全編においてもわずかに2割にとどまっている。これは、作文において意見の述べ方に一貫性を保とうとする書き手の意向が働いていることに起因すると考えられる。

JPの意見文に「私は～と思う」「私は～と考える」のパターンが多く、その大部分が意見文の冒頭や結尾に置かれているのは、意見文ならではの特徵で、自分の主張を明確に伝えるために話の展開や締め括りに、敢えて一人称主体を明示することで、話し手の立場表明をしていると捉えられる。

一方、JPの意見文では、「と思う」が主観性の強い感情的な判断文に限らず、論理的に自分の主張を表明する文などにも使われているのに対し、「と考える」は、やや硬い口調で客観的かつ論理的な推論の結果を示す文に限って使用されている。

また、JPの意見文において、「と思う」の例文(78例)のうち3割が敬体(「と思います」)であるのに対し、「と考える」の敬体は42例のうち2例しかない。JPの意見文において「と思う」の敬体使用が目立つのは、「と考える」より、「と思う」の方が柔らかい文体に適しているからであろう。KR+TMの意見文では、「と思う」(158例)の6割以上が敬体である。こういった使用傾向からもわかるように、全体を通してJPの方がKR+TMより、文体の硬い表現を使用していることが観察される。

5.3 「と思っている」と「考えている」の使用傾向

JPにおいて、「と思っている」と「考えている」はほとんど使用されていない。一方、KR+TMにおいて「考えている」は7例にとどまっているが、「と思っている」は「と思う」の次に多く使われている。JPがわずか1例にとどまっているのに対し、KR+TMは37例を使っていて、特に、TMはKRより3倍近く多く使用している。橋本(2003:47)は、「KYコーパス」⁽⁶⁾から採集した57例から、「と思っている」の不自然な使用は、韓国語母語話者に多く観察されるとしているが、これはジャンルの

(6) 「KYコーパス」とは、90人分のOPIテープを文字化した言語資料である。母語別に、中国語、英語、韓国語がそれぞれ30人ずつで、その30人のOPIの判定結果別の内訳は、初級5人、中級10人、上級10人、超級5人ずつとなっている。

違いや日本語学習者の習得レベルがまちまちであることに起因すると言えよう。

庵ほか（2001：189-190）では、「と思う」と「思っている」の違いについて、「と思う」はその場で判断を下す傾向が多いのに対し、「思っている」は話し手がある程度継続して持っている判断を表わす傾向が強いと説明している。このようなアスペクト面からの説明では、次のような違いの説明ができない。次の用例（9）、（10）のように、話し手が個人的な判断や主観を強く押し出す場合は、前から持っている考えであっても、「思っている」をつけると不自然な文になる。

（9）私はインターネットがある以上、もう新聞や雑誌は要らない思っている。（KR008）

（10）いくらインターネットが自由で便利でも、新聞や雑誌など本の存在は、私にとって不可欠で必要なものだと思っている。（TM013）

橋本（2003：35）は、母語話者は「表出⁽⁷⁾+思っている」という形式を多く使用するのに対し、学習者は「判断文+思っている」という形式を多く使用すると指摘した上で、「判断文+思っている」は「信念」「こだわり」とも言える二次的な意味が生じるため、使用される文脈が限られると述べている⁽⁸⁾。本稿の検討作業からみても、JPの意見文に見られる唯一の「思っている」は「表出+思っている」を表しているのに対し、KM+TMは37例のうちわずか2例だけが「表出+思っている」を表し

（7）「～（よ）う／たい／ほしい」のように話し手の感情や思考、意志を表出する文。

（8）日本語記述文法研究会編（2003：185）は、「と思う」はその事柄が実現するという判断を下す意味になるが、「思っている」は直接判断を下すのではなく、話し手がそれを信じていたり期待していたりすることを意味すると指摘している。

ている。

- (11) 私も実際新聞を購読しているが、これからも購読し続けたいと思っている。(JP024)
- (12) これは私の小さな願いかもしれませんが、図書館の人々、地下でついで新聞とかを読んでる人々の楽しみをうばわないでほしいと思っています。(KR047)
- (13) 一方的にマスコーミーに提拱されるインフォを受け取るのはいけない。マスコーミーは批判者ではなく、ナレーターはずだということを皆さんに知らせていただきたいと思っている。(TM028)

橋本(2003:35)の言う二次的な意味(「信念」「こだわり」)に限らず、自分の意志表明や意見を主張するに当たって、「と思っている」は不自然である。特に、冒頭文や結尾文の場合は、意見の核心を明確に述べる必要があるため、「と思う」の方が適している。実際にKM+TMの意見文に見られる「と思っている」のほとんどが「と思う」に置き換えた方がより自然な文になるものであった。

- (14) パソコンも小形化しているし、ネットブックという軽くて携帯性の高い製品が出ているが、まだ無線インターネットがそんなに広がってないので、新聞や雑誌にはかなわないと思っている。(KR008)
- (15) 次、インターネットの使い方は簡単だとは言えるが、お年寄りとかにとって、新しい技術が苦手だし、学習能力も記憶力も衰えてきているので、新聞や雑誌など紙に載せてある記事は分かりやすいと思っている。(TM053)

以上のように、KM+TMにおいて「と思う」と「と思っている」の使い分けができず、誤った使い方をしていることが観察された。これは、橋

本（2003）の指摘通り，学習者が「と思っている」をアスペクトの面からしか捉えていないために生じるものであると考えられる。つまり，KM+TMは「と思っている」を自分の判断や意見が持続性をもつものであることを表すために使用していると言える。

5.4 「と思われる」「と考えられる」の使用傾向

「と思われる」と「考えられる」は，それぞれ「と思う」と「考える」の意味を持っているが，より客観性の強い文末形式でレポートや論文などにも使用が可能である。主に「合理的な判断に基づく結論」であることを明示する際に使われるが，JPに比べてKM+TMの使用はその半分に満たない（「と考えられる」（JP：13 > KR：2+TM：2），「と思われる」（JP：9 > KR：1+TM：0）。KM+TMにおいて，「と思われる」「考えられる」の使用度数が低いのは，「と思う」の使いやすさが影響していると思われる。

(16) インターネット性質の是はユーザーの情報選択の自発性及びその伝達速度にあり，非は信ぴょう性が疑わしいことにあると考えられる。

(JP042)

(17) インターネットの問題やせきになを持たない記者の問題などをかいつさせないかぎり，デジタルのしりょうを信用することはむずかしいと考えられる。（KR006）

3節で述べたように，初級日本語教科書や指導書において「と思われる」と「考えられる」は全く提示されていない。日本語学習者の作文の上達を図るためには，文体の違いを考慮し，「と思われる」と「考えられる」のような書き言葉に相応しい，適切な表現を教える必要がある。特に，文末の表現法によって文章が大きく変わることを認識させ（ここで言う「と思う」系と「考える」系の違いなど），適切な文末形式が使いこ

なせるように指導することが有効である。

6. おわりに

以上、日本語母語話者との比較を通じて、上級日本語学習者の意見文に見られる判断の文末形式「と思う」系と「と考える」系の使用傾向を分析した結果、次のような特徴が見出された。

- ① KR+TMにおいて、「と思う」の使用 (JP : 78 < KR : 87+TM : 71) はJPより2倍ほど多いのに対し、「と考える」の使用 (JP : 42 > KR : 0+TM : 1) は極めて少ない。
- ② JPに比べKM+TMの「だろう」(「でしょう」(敬体), 「であろう」(常体))の使用が半分未満なのは、KM+TMが推量を表わす際に「だろう」を使わず、代わりに「と思う」を用いる傾向があることに起因する。
- ③ KR+TMの場合、「と思う」を話し手の立場表明に限らず、推量化した形式として幅広く使っているのに対し、JPは「と思う」を話し手の立場表明や、自己主張を示す言語形式として使用する傾向がある。
- ④ JPにおいて、「と思う」の例文(78例)のうち3割が敬体(「と思います」)であるのに対し、「と考える」の敬体が42例のうち2例しかないのは、「と思う」の方が柔らかい文体に適しているからである。
- ⑤ JPでは、「と考えている」「と思っている」がほとんど使用されていないのに対し、KM+TMで「と思っている」の使用が目立つのは、自分の判断や意見が持続性を持つものであることを表わすために、「と思う」を使うところに「と思っている」を使用していることに起因する。特に、TMの方がKRより「と思っている」の使用が3倍近く多い(TM : 27 > KR : 10)。
- ⑥ JPにおいて、「と思われる」「と考えられる」の使用がKR+TMに比べ倍以上多いのは、KM+TMは客観的な意見や一般化した推測を述べ

る場合も「と思う」を用いる傾向があるからである。

- ⑦全体を通して JP の方が KM+TM より、文体の硬い表現を使用している。

以上のように、上級レベルの日本語学習者において「と思う」の過剰使用や「と思っている」との使い分けができないのは、初級から中級にかけて十分な指導が成されていないことに起因する。また、上級日本語学習者において「と考える」や「と思われる」、「と考えられる」の不使用が目立つのは、話し言葉と書き言葉の使い分けに関する指導が十分に行き届いていないためである。初級では主に話し言葉が導入されるが、中級以降においても話し言葉と書き言葉の使い分けを意識する機会が少ない。

上述した問題の解決を図り、中級以降の日本語学習者の文章力を高めるためには、初級の後期段階において、「と思う」系と「と考える」系の情報を与え、話し言葉と書き言葉の表現の違いを認識させる必要がある。文末の表現法によって文章が大きく変わることを認識させることで、中上級レベルの学習者における「と思う」の過剰使用が改善されることが考えられる。

本稿では、日本語学習者の作文における文末形式の使用傾向を探る一環として、上級日本語学習者の意見文における判断の文末形式「と思う」系と「と考える」系の使用傾向について、日本語母語話者との比較を通じて考察を試みた。今後、日本語学習者のための効果的な作文の指導案の知見を得るために、文末形式と共起しやすい副詞成分を分析するなど、構文的側面の規則性についてさらに考察を深めたい。

参考文献

- 庵功雄・高梨信乃・中西久美子・山田敏弘（著）白川博之（監）（2001）『中上級を教える人のための日本語文法ハンドブック』スリーエーネットワーク。
伊集院郁子・高橋圭子（2004）「文末のモダリティに見られる“Writer/Reader visibility”——中国人学習者と日本語母語話者の意見文の比較——」『日本語教

- 育』123号86-95項.
- (2012)「日本・韓国・台湾の大学生による日本語意見文の構造的特徴——「主張」に着目して——」『日本語・日本語研究』2号 東京外国語大学国際日本研究センター, 1-16項.
- 大島弥生 (1993)「中国語・韓国語話者における日本語のモダリティ習得に関する研究」『日本語教育』81号93-103項.
- 佐々木泰子・川口良 (1994)「日本人小学生・中学生・高校生・大学生と日本語学習者の作文における文末表現の発達過程に関する一考察」『日本語教育』84号1-13項.
- 佐々木泰子 (2001)「課題に基づく意見の述べ方——日本人大学生の場合・日本語学習者の場合——」『日本語教育のためのアジア諸言語の対訳作文データの収集とコーパスの構築』平成11・12年度科学研究費補助金研究基盤研究(B)(2)研究成果報告書, 219-230項.
- 日本語記述文法研究会編 (2003)『現代日本語文法4 モダリティ』くろしお出版.
- 橋本直幸 (2003)「「と思っている」について——日本語母語話者と日本語学習者の使用傾向の違いから——」『日本語文法』3巻1号35-48項.
- 宮原彬 (1998)「中級後期から上級段階にある学習者の作文の問題点: 作文教材作成のための類型化の試み」『長崎 大学留学生センター紀要』第6号1-23項.
- 森山卓郎 (1992)「文末思考動詞「思う」をめぐる」『日本語学』11巻9号105-116項.